

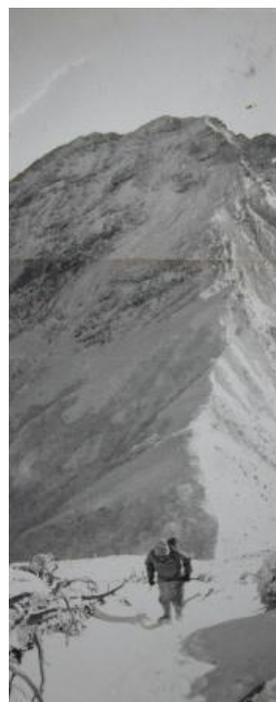
ハケ岳	赤岳鉱泉から主要峰(冬山合宿)	No.077
-----	-----------------	--------

昭和41年12月25日

冬山合宿最終打合せ、四谷イーグルにて。参加メンバーは鶉飼・吉野・小林の三名と確定。食料買出し実施。合宿費一人1500円徴収。
 年末の交通機関の混雑を避けて、出発は12月28日の早朝、5時24分高尾発と決定。
 このため、都心に住む鶉飼は吉野の家に前夜泊することになった。

昭和41年12月28日 <出発 → ベースキャンプ入り>

4時25分立川駅北口集合。皆目的のためには手段を選ばず、タクシーで到着。吉野がアルコールタンクを手に持って改札口に入ろうとしたら駅員に止められた。その時鶉飼少しも騒がず、「あ、これ食用油です」
 4時42分発で高尾へ。高尾5時24分発松本行、乗客はほとんどいなく帰省ラッシュをよそに寒々しい限り。パッキングをし直して握り飯の朝食、デザートは野中さん差し入れのロッテバッカスチョコレート。
 茅野着は9時54分、バスは10時50分発。駅前でラーメンを食べて登山者カードを提出。この時間、登山客はほとんどいない。(バス代120円・荷物代100円)
 美濃戸口着12時、「サ・ム・イ」。すぐに歩き出し、美濃戸山荘の前で昼食。ここは海拔1713m。
 ちょうど良い加減に雪の付いた沢沿いの道を歩き、小雪のちらつく赤岳鉱泉(2220m)に16時に到着。
 まだテント村ができていないのでかなり条件の良い場所が確保できた。急激に気温が低下しており、体中が振るえて、胸がヒューヒュー言い出した。急いで幕営。ベースキャンプ、我々の一週間の住処になる。天幕の中にはカレンダーも温度計も付いているデラックスルーム。
 天幕場使用料は一人一日当り30円(総額540円)。
 18時から夕食、初日のメニューは豚汁。16時の気象通報が取れなかったので22時まで起きていて天気図を作成。典型的な冬型気圧配置。22時15分就寝、気温は-7度。



昭和41年12月29日 <ベースキャンプから阿弥陀岳を往復>

起床4時40分、気温-12度、天気は快晴。朝食は昨晚の豚汁をベースに雑炊。コンロのポンプのパッキングが凍って縮まったが、抜き出して整形して解決。
 出発7時40分、気温-17度。中山乗越(2369m)を越えて行者小屋経由阿弥陀の科尔へ。今日の目的はウォームアップとトレーニング。



阿弥陀の科尔10時15分。科尔から阿弥陀岳を往復。ピストンの後は科尔で昼食。
 景色は満点。見えぬものは何もないと言っても言いすぎでないぐらいの展望。
 昼食後にもう一度阿弥陀岳を往復。二度目は余裕ができたせいか、演出効果付の写真撮影も登場。
 先発のカメラマンが頂上でカメラを構えて待機するところへモデルの私が教科書どおりのフォームで登っていく。モデルの私もできるだけ良いアングルを、とわざわざ30m下ってから登り直したり。(右の写真)
 リラックスした一日で三人とも山の高さや寒さに馴れたように感じた。帰路は中岳を越えて文三郎新道を行者小屋に下り、ベースキャンプへ。昨日の残りのチョコレートを食べて一休みの後気象通報を聞きながら夕食の支度。
 16時の気象通報で天気図を作成し、16時30分から夕食。昨日と同様の天

踏み跡 < My mountains >

気で、ありがたいことに明日も好天の模様。夕食はカレーライス。明日は待望の主稜めぐり。18時シュラフィン。19時30分には眠りについた。まずは順調な滑り出しと言える。空は今夜も星の大合唱。

昭和41年12月30日 <ベースキャンプから硫黄岳、横岳、赤岳と一巡>

起床4時10分、勿論よい天気。朝食はハウレンソウの味噌汁。出発6時30分、気温-14度。

偵察山行の時と同じルートで硫黄岳に取り付く。北アルプスの全山、木曾御岳、南アルプスまでぐるりと見渡せるが、中でもとりわけ独立峰の木曾御岳が目立つ。

オウレン小屋の分岐から硫黄岳への稜線は一ヶ月前に比べるとかなりの雪の量になっている。

硫黄岳以降の偉大なる風の猛攻はより一層の強さである。



9時15分、今回も横岳東斜面の日あたりの良いところで小休止。誰もが休むところらしく、雪の中にいくつも尻の跡が付いている。

富士山の2800mぐらいの位置に薄い雲の帯のようなものがある。ひよっとすると天気が崩れる前兆かもしれない。

横岳主峰直下で岩場をトラバースしていたら、踏み出したアイゼンの前に腕時計の落し物。シチズンの17石、たいした時計ではないが、落とした人は困っているに違いない。7時45分で止まっているが、これが今朝の7時45分のこ



とどしたら、持ち主は赤岳鉱泉か行者小屋を朝出発した人に違いない。

我々は今日まだ誰もすれ違っていませんので、落とし主の人は、我々と同じコースを歩いている人だろう。色々推理を楽しみながら赤岳へ。

時計はズボンのポケットに入れておいたら、しばらくして動き出した。落ちて壊れて止まったのではなく、凍って止まっていたようだ。

中岳のコレ11時30分、昼食。風があって寒いので昨日同様阿弥陀のコレに移動して大休止。ここは風もなく日当たりも良い絶好の休み所。食事の後軽い昼寝を楽しみ13時に出発。

ベースキャンプに戻ってもまだ14時。快い陽射しが勿体無いので、濡れた物を干すことにした。拾った時計は鉱泉の管理人に託し、後を任せた。

冬山生活もだいぶ慣れてきたので、今日は天幕の周りを整地して風除けにブロックを積みベターリビングの研究。

16時の気象通報、富士山にかかっていた帯状の雲はやはり天候の悪化

に結びつきそうだ。日本海と東シナ海に低気圧が発生し、そのために日本を覆っている高気圧の等圧線にもだいぶひずみができている。明日の前半ぐらいまでがせいぜいで、明後日は崩れるだろうという天気予想が立った。

今日の夕食は鶉飼の自慢のロシアスープ。16時30分から夕食。食事のあと反省会と明日の予定の検討。今日まで一応メインスケジュールは消化したので、明日以降は天気次第で柔軟に動くことで一致。

明日は天気がまだ崩れなければ天狗岳のピストン、明後日の天気は今のところあてにしないことにした。天候悪化の兆しの何よりの証拠に、空一面の星にちらつきがある。18時15分シュラフィン。

今日は朝から入山者が多く、ベースキャンプは完全に団地化した。ランプを持たなくても天幕から漏れる光で十分に歩くことができる。但し良く見て歩かないと、よその天幕の張り綱に足をとられる可能性がある。



踏み跡 < My mountains >

昭和41年12月31日 <ベースキャンプから硫黄岳を経て天狗岳を往復>

大晦日、天幕の中のカレンダーも残り一枚。4時10分起床。意外にも天気はまだ悪くはないようだ。朝食はフレイク丼。7時出発。赤岩の頭8時、硫黄岳(2760m)から夏沢峠(2430m)への下りと根石岳以北は偵察山行の時と同様に猛烈な北西風。

ベースキャンプから約3時間、10時15分に東天狗岳(2646m)に到着。ミロのヴィーナスのような柔らかな曲線で連なる西天狗岳を往復。

根石岳(2603m)付近の樹林帯に誰かが野菜を捨ててある。退屈しのぎに雪の上に芸術作品を造ることになった。題して「天狗」。目はジャガイモ鼻はニンジン、口もニンジン、杉の小枝で髭と髪を付けて出来上がり。

三人の知能指数を合わせて出来上がった芸術作品の写真を撮ってくるのを忘れた。

帰路は趣向を凝らしてオウレン小屋に下ってみることにした。天気が悪くなっているらしく、遠くの景色はあまり良くない。深雪の中のひっそりとしたオウレン小屋で昼食。拳ほどの太さのツララが屋根から下がり、それがレンズの働きをして向こうの景色が逆に見える。11時45分に出発。

小屋から赤岩の頭への樹林帯の急登にはいささか閉口。もう空は雪雲に覆われて、いつ降るかというような状況になってしまった。手際よくピストンを終了して、13時10分ベースキャンプ帰着。

まず、おやつにインスタントラーメン。話題は根石岳からの風の強さとオウレン小屋からの樹林帯の急登のことに尽きる。「よくやったなあ」「ほんとに一」。

16時気象通報、東シナ海の低気圧はさらに強くなっている。今日なんとか天気が持ったのは太平洋に小さな高気圧がふたつできたためらしい。明日は絶対駄目だろう。

鉱泉のキジ場へ用足しに行ったら青いやツケの男とすれ違ったが、高校の山岳部の堀田とよく似ていた。

今日は大晦日。天候の予測からすると明日は停滞の見込みなので今夜はゆっくりすることになった。

夕食は豚汁、天幕の床下の仮設冷蔵庫の中の豚肉も残りが少なくなってきた。

ラジオで紅白歌合戦を聞いたり、ハモらない歌を歌ったり、様々に語り合ったりで除夜の鐘と元日の0時の時報までをゆったりと過ごした。

0時を過ぎると雪が降り出し、いよいよ天気は崩れ始めた。我が天気予想はぴったり当たった。

今年も色々なことがあったが、24回も山に登れたし、日数にすれば42日を山で過ごしたことになる。ひとえに、健康とよき仲間の存するが故だと思う。また来年も今年以上に実りのある年にしたいものだと思う。

昭和42年1月1日 <停滞日>

起床8時30分、雪は休みなく降り続き、時々風をも伴っている。待望の「山の正月」は停滞。

我が町「北多摩郡国立町」は今日から「国立市」になった。昨晚の豚汁で雑炊を作り朝食。

雪は一時間に10cm以上も積もり、時々天幕の内側から叩いて雪払いをしなければならない。

遅い朝食の後、何かと議論のネタを探しては論じ合い、笑談したり。曰く「登山はどうあるべきか？」曰く「自然界に対する人間の考え方はいかに？」曰く「毛沢東と社会主義は？」「女性観は？」などなど。

同じ年齢の若者三人がわずか一間四方に満たない部屋の中で口角泡を飛ばし、天幕の雪を叩き落としながら喋りあう、またとない体験の場となり、結局厠に出かける以外は天幕を一步も出ずに一日を過ごした。

昼食は雑煮。気温が高くなっているために床下の雪が融けだして、天幕の底に水が溜まり出してきた。

互いに一番好きな歌を歌ったり、いい歌を教えあったり、日本の民謡を北のはずれから順番に歌ったり、まったくハモらないコーラスに挑戦したり……、午後もうったりとした時が流れた。

15時30分から夕食、今夜のメニューはミルクシチュー。全然行動せずに三食まともに食べ、三人とも体重



踏み跡 < My mountains >

が増えたような気分で夜を迎えた。

今頃机の上には年賀状が届いているに違いない。誰と誰から来ているだろうか？

昭和42年1月2日 <停滞日・近所を散歩>

起床4時50分、雪は止んだようだが未だ重苦しい空はいつ吹雪になるかわからない様相。

朝食は雑炊。昨日一日中天幕の中において運動不足なので、今日は少し遊びに行こうということになった。

8時出発。行者小屋でアイゼンを締めなおしながら気温を測ってみたら-10度。

阿弥陀に登る人がコルまで連なっていて面白くないので、北稜近辺を登ってみることになった。

腰までのラッセルで肩の直下辺りまできたら、行く手に大きな亀裂を発見。昨日から気温が上っているために雪崩が起きやすくなっている。危険回避の為この辺で打ち切り Uターン。

とは言え気温は徐々に下がっているようで、降り出した雪が顔に付き、眉毛とまつげが凍りつくようになってきた。12時15分にベースキャンプに帰着。昼食の後またダベリ。

16時30分から夕食、明日の下山を前に「サヨナラコンパ」と称して、残った食料を使ったゴツタ煮。

食事をしながら今回の合宿を振り返って反省会。日程と行程の組み方がうまく行ったという点で三人とも意見が一致した。殆んど無理のないように予備日数(停滞日)を組み込んだ計画としたことによると思う。冬山技術の習得という点でもまあまあと言える。それに加えて、停滞という場で三人が様々なことを語り合ったということも青春の思い出として大いに価値があった。19時就寝、雪がまた深々と降り続けている。

昭和42年1月3日 <ベースキャンプ撤収 → 下山>

起床5時、朝食はポタージュスープ。天幕の入口を開けたら、昨晚のうちに降り積もった雪がどうと流れ込んできた。周りを見ると、夜の内に多いところでは1m以上積もったようだ。気温もかなり下がって一番寒いよ

うに感じる。

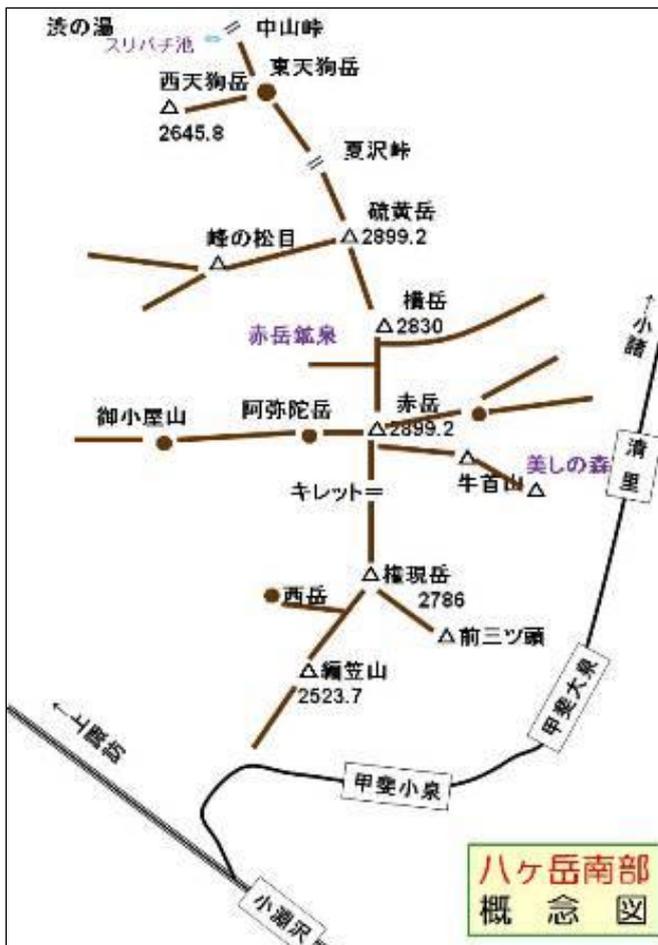
7時からパッキングを開始。最後の難関がウィンパーの撤収。氷結して固くなってしまったため、なかなか小さく畳めない。ゴミはガソリンをかけて燃やし、すべて完了。一週間の憩いの場は雪の上に四角い平坦な跡を残して、いかにも永遠に残る遺跡のような感じがする。不思議にも離れがたい愛着まで感じる。

10時15分吹雪の中を出発。「山よサヨナラご機嫌よろしゅう、また来る時にも笑っておくれ♪♪」すっかり雪をかぶってしまった川沿いの道を美濃戸口へ。今日は下る人が多く、前にも後ろにも人が連なっている。

12時15分美濃戸口に到着。途中の広い道は凍結してツルツル滑り足をとられ苦労したが、無事帰着。

バスを待つ行列に加わり約二時間、14時20分発のバスに乗る事が出来た。茅野着15時20分。

15時22分発の臨時列車がホームに入ってくるところだと気づいたので、急いで駆け込んで飛び乗った。この身のこなしの速さは正解だった。おかげで空いている列車に乗ることができた。ところが、



踏み跡 < My mountains >

山の中で凍りついていたキスリングが駅舎の中で融けだして、列車に乗るべく急いでグッと担いだらピリッと破けてしまった。1300円で買ってもう五年も使ったのだから仕方あるまい。ロープで全体を縛って何とか家まで持ちこたえるようにした。

新宿まで五時間半、家に着いたのは21時ちょうどだった。明日からまた仕事だ。なんだか日頃溜まっていた疲れが消し飛んだようで、心も体も軽く、やる気が出てきた。反省会は1月7日の予定。

以上

(修正・更新:2023年11月)